

読んで考えるトラブル対応シミュレーション  
人事労務の  
リスク管理メモ

いま職場で起こっているリアルなトラブル事例集

2021年 9月号

蛇の道は蛇

Aは限界だった。上司である店長Bは、Aと二人だけになったときに豹変する。こそこそと陰湿で執拗な嫌がらせを繰り返す。聞き流していれば、と言われても、それが日常的に繰り返されれば、冷静な気持ちを持ち続けることも難しくなってくる。

他のスタッフが居る時は、徹底して模範的な優等生店長を演じることで、本性を隠し通すつもりらしい。最近では、問題が公にならないことを良いことに、徐々にエスカレートしている。

「... (調子に乗るなよ)」

「何だ、その目は。文句があるならばはっきり言えよ！」

「... (そうだ、もっと言え!)」

「またダンマリか? お前のその目は、私を侮辱している。その目は犯罪だ。お前の存在そのものが犯罪だ」

「... (よし、その調子だ!)」

「底辺大学出身のクズ野郎。働かせてもらえるだけでも、有り難いと思え、パーカ」

「B店長、お疲れ様です」

いつもより幾分早い時間に出社してきたスタッフのCに不意を突かれたB店長は、滑稽なほど動揺している。

「お、お疲れ様です...え、えっと」

「どうしたんですか、店長...」

「い、いや...何でも...ない」

「聞こえちゃいましたよ、パーカ、つて...店長らしくないですね」

Aは必死に笑いをこらえた。

「そ、そんなことは、言っていない...」

「ウソはよくないですよ、聞こえちゃったんですから...」

「あ、いや、その、Aが、しょうもないミスをしたので...」

「それでAさんに、パーカって、言ったんですか? それ、パワハラですよ」

「あ、いや、あの、違った...自分のミスだった...」

「何だか、変な店長...」

「... (馬鹿め、化けの皮がはがれて、慌てふためいてやがる。ウジ虫め)」

Aがニヤリとして、横目でBを見ると、思わず目が合ったBは、顔を真っ赤にしてAを睨み返した。

「ホントに、今日の店長、おかしいですよ、Cさん」

「何かあったのかな? ねえ、店長...」

Bは怒りが爆発するのを押さえるのに精一杯だった。

くそ、Aめ、ただではおかん...

「A君、ちょっといいかな...」

「店長、いきなりなんですか?」

「少し、話があ

る。奥の控室まで来てほしい」

「は、はい...」

とAは応じるそぶりを見せながら、Bの陰で、コソコソCに手招きをした。Cは小さく頷いた。

「おまえ、どういうつもりだ?」

「何のことでしょう?」

「とぼけるな! わざわざCの前で、上司の私をコケにして、ただじゃ置かぬえからな」

「...」

「何黙ってるんだよ! このクソ野郎! ここで私に土下座しろ」

「...」

「なに突っ立ってるんだよ、土下座しろって言ってんだろ、このアホが!」

Bは興奮のあまり、思わず声が大きくなったところで、ドアの前から、誰かが走り去る足音が聞こえた。慌てたBが、ドアを開けると、Cが駆けていく後姿が見えた。

「クソ...お前ら、グルか...」

この日以来、この模範的優等生店長Bは、部下である全スタッフから、軽蔑の視線を投げかけられ、和やかな日常会話などは皆無になった。スタッフ仲間と話をしても、そこにBが現れると、途端に会話を止め、Bに背中を向けた。Bは職場で総スカンを食らったことに耐えきれず、数日も経たずに、体調不良を理由に欠勤するようになった。

「これは何かの間違いです。これは冤罪です。私は畏にかけられたのです。私は被害者です。部下たちから、集団でハラメントを受けたのです...」

「Bさん、ちょっと待ってよ。だって、土下座しろ、アホ、って怒鳴ったのは、事実でしょ」

「違います、違います。それはAとCがウソをついているんです。二人はグルです」

「それじゃ、何で職場のスタッフたちに、ホントのことを説明しないで、逃げ出しちゃったの? これじゃ、事実だと思われても仕方ないでしょ」

「そんなことを言ったって、誰も聞いてくれません」

「あのね、あなたは店長なの。いい? 職場での混乱を収拾しようともしていない。これじゃ、職務を全うしていない、とも言われかねない」

「何で私のことを分かってくれないんですか? ひどすぎる...」

人事課長のDは、Bがそこまで冤罪無罪を主張するのには、何かわけがあるのでは、と考え、相手方当事者であるAから、事実関係の聞き取りをすることにした。

「...などとBは言っているが...」

「やはりそうですか...実は私は、数年前から、Bからの暴言に悩んでしました」

「...数年前から...」

「はい」

「まずまず話がわからない...」

「いつか収まれば、と我慢をしていたのですが、私も限界で...」

「じゃあ、今回のようなことは、これまでずっと続いていた...」

「ええ、そうです」

「Bの話と、全くかみ合わない」

「...あまり出したいくないのですが...」

「何を?」

「録音があります」

「録音! ?」

「はい、これは先日のやり取りです」

D人事課長は、決定的な証拠で、普段のBからは想像ができない暴言を明らかにされ、驚くしかなかった。

「Bは虚言癖があるのかも知れない」

「虚言癖...」

人事担当役員のE部長は、今回の問題からBの特性を推測した。

「私は医者ではないし、詳しいことは分からないが、おそらくBは、自分が言われたくないと思っていることを、Aに対して繰り返し言っていた」

「どういうことですか?」

「Bはいわゆる三流大出だし、常におどおどした社員だった。自分に自信がない、バカにされるのが怖い、そういう不安な気持ちを押し殺すために、完璧な社員、模範的な優等生を演じることで、バカにされないための鎧を必死に着込んでいた」

「なるほど」

「それでもバカにされるのではないかという不安が拭えないとき、別の誰かをバカにすることで、自分はバカにする立場であって、バカにされる立場ではないことを確認していた、とか...」

「そんな身勝手...」

「ただ、B本人も必死で良い社員になろうとした気持ちは汲んでやらないと、本当に問題社員になってしまう」

「はあ...」

「Bを店長にしたのは、明らかにミスキャストだった」

「私もその通りだと思います。あれでは、部下が耐えられません」

「B自身も、苦しかっただろう。頃合いを見計らって、何か適当な部署に異動させた上げたほうが良い」

「そうします」

その後まもなく、Bは店舗の現場を離れ、仕入れ部門のバイヤーへの異動が命じられた。

バイヤーの仕事に不満はなかったが、時折襲ってくる、自分がバカにされているような気持ちから解放されるわけでは無かった。店長だったころは、Aをこき下ろすことで、自分の気持ちのバランスを取っていたが、今ではそのような気持ちのはけ口も無い。ああ、誰かをバカにしたい、そうしないと自分がつぶれてしまう...

Bは気持ちの整理をしようとカウンセラーを頼った。

「なるほど...そのストレスの原因はAとCね。きっとAとCに復讐をすることで、スッキリすると思う」

そう言われると、確かにその通りだと思えてきた。じゃあ、どうすれば復讐ができるか、今は部下でも何でも無いAとC...やっぱり自分を追い込んだ罪は許せない...Bの頭では、結局ここに戻ってしまう。

「やっぱりAとCは許せません」

D人事課長は、またか、と言った様子で大きくため息をついた。

「それを逆恨みというんだよ」

「このままでは、私はつぶれてしまいます」

「はあ、...何を言っているのか...」

「復讐が必要なんです」

「おい、自分で言っていることがわかっていないのか？」

「もちろんです。カウンセラーに、復讐が必要、ってアドバイスされたんですから」

「バカバカしい...そんなアドバイスを鵜呑みにするな」

D課長はあきれて席を立つと、入れ違いに同僚のFが近づいてきた。

「復讐がしたい、って...」

「聞いていたのか」

「おまえ、面白いやつだな。復讐がしたいって、言う相手を間違っているよ。人事課長に復讐がしたいって言って、はいそうですか、って答える訳ないだろ。お前ホントにバカだな」

「ば、バカって言うな！」

「だって、ホントにバカだろ。バカは自分をバカだと認めることができない。だからバカのまま。おまえも、自分でバカだと認めてみな」

「バカ、バカって、言うな！！」

「自分をバカだって認めることが出来たら、楽になるし、復讐もできる」

「私は、...バカじゃない...」

「これじゃ、いつまでたってもバカのままだな...かわいそうなやつだ...」

「クソ...」

Bは周りに憚ることなく、大粒の涙をポロポロとこぼした。自分をバカだと認めたら、バカじゃなくなるし、復讐もできる、って、どういうこと？ Bは自問自答を繰り返したが、訳が分からない。

「やっぱり来たか...」

BはFに、問い返した。

「本当に復讐ができるのか？」

「やっと自分のバカを認めたか」

「...」

「G統括部長の軍門に下れ」

「G部長...!？」

「そう。創業社長の息子。といつても、ただの社員だけだ」

「二代目、じゃないんだ」

「二代目は娘婿。Gはやんちゃすぎで事実上勘当状態。でもクビにしてあげられぬモノにでもなったら困る、ということで、一応生活に困らない程度に首が繋がってる」

「やっぱり親心か」

「創業一族の保身でしょ。でもG本人は、自由気ままで良いみたいよ。私もその恩恵に預かってるし...」

「恩恵!？」

「腐っても鯛だから...陰では、G軍団、って呼ばれてる」

「G軍団...」

Bは思わず鼻で笑った。

「復讐がしたいんだろ。Gに絶対服従を誓って復讐を頼めばいい」

「簡単に言うね」

「末端店舗のスタッフの処遇など、Gにすれば、どうにでもなる」

「本当に!？」

「ああ。言ってみれば、社内ヤンキー集団。その代わりに、危ないこともやらされるし、まず出世は望めない...」

「それが、G軍団...か...」

Bはいつの間にか、流れに押されるように、G軍団の一員になっていた。軍団に対しては、触らぬ神に祟りなし、社員の誰もが、程度の差はあっても畏怖の眼をもって接する。これはBにとっては快感だった。もう誰も自分をバカにしない、できるわけがない、G軍団の一員だから...

BはすっかりG統括部長の腰巾着になっていた。AとCに復讐も果たして、ようやく自分の居場所を、会社の中で見つけた満足感に浸っている。

「Bは、Gなどと言うとんでもないところに収まってしまった...」

E人事部長は、ため息をついた。

「あんな連中が社内で跳梁跋扈すること自体、異常なことですよ」

「だが、親父さんの目の黒いうちは、Gのクビは無理だよ、D課長」

「それにしても、AとCは、気の毒でした。暴力はでないと言っても、あれじゃ、まるで吊し上げ、リンチでしょう。社員の安全確保のためにも...」

「残念ながら、自分の利益のために、彼らを利用しようとする役員もいる」

「では、このまま...」

「いや、もちろん看過できる状況ではない。懲戒処分など屁とも思わない連中だが、まずは自宅謹慎処分にする」

「しかし、これまで黙認放置されてきたつければ、想像以上に大きいかと...」

「もとより、承知の上だ」

当事者の真意を読み取り、問題に対する認識のギャップを埋め、話をつなぐ

オフィスハラダの

## 「社外相談窓口」

<https://officeharada.org/helpline/>

オフィスハラダが運営するハラスメント相談窓口は、開設以来十数年、年間千件を超える相談対応実績があります。ご相談内容は、ハラスメントに限らず、多方面のテーマにまたがる多岐に渡る内容ですが、いずれのご相談にも一貫して変わらない対応は、「問題の社内的解決を第一に考えたアドバイスに徹している」ということです。

労使の対立関係を前面に押し出さず、いかにすれば平穏迅速に、問題の収束を図ることができるか、この点に最もエネルギーを注ぎます。なぜならば、問題の社内的な解決は、労使双方にとって、物心両面にわたる負担とストレスを最小限に抑える方法であり、最も望ましいものだからです。

この相談窓口を御社の社外相談窓口としてご活用ください。詳しくはウェブで、携帯からは右のQRコードをご覧ください。



必要な時に、必要なサポートを、必要なだけ。これがオフィスハラダの

## 「相談顧問」

<https://officeharada.org/consulting/>

人事・労務に関するお悩み・疑問をスッキリ解消します。

労務管理の改善提案をします  
就業規則などの諸規程の作成・見直しをサポートします。

トラブルの未然防止を図ります。

万が一の問題発生時には、平穏迅速な解決を促進します。

「今すぐ相談したい」...下記 URL

<https://officeharada.org/consulting/contact/>

からすぐにご相談頂けます。初回ご相談メールは無料です。携帯からは右のQRコードをご覧ください。



## 「人事労務のリスク管理メモ」

記事内容についてのご意見・ご質問は  
e-mail : [info@officeharada.org](mailto:info@officeharada.org)

TEL : 050-3301-6118

FAX : 050-3730-4575

定期購読(無料です!)はお気軽に...

詳細は <https://officeharada.org/nl/>  
バックナンバーも掲載中! ご覧ください

発行: 社会保険労務士オフィスハラダ